

富士に祈る 65

信仰と伝承 — 岡野聖憲・その19 —

國學院大學兼任講師 城崎 陽子



内宮御正殿への参進(解説会提供)

先回は、戦局が拡大し、いよいよ物資が不足していく中で会員に産業指導を行い、これまでの自らの歩みを「太陽精神碑」に象徴させ、皇紀二千六百年を機に、さらなる進展を図る決意を聖憲が固めたところまでを記した。今回は新設された東京道場において宗教教師養成のための「宗教教師教学学院」を開設し、聖憲が考えるところの「宗教の普遍的価値観」を説きつつ、「三聖地巡拝」や「真綿モール編」といった実践活動を行うところまでを記す。

昭和十六年(一九四一)一月三日、新設された東京道場ではじめての全支部合同新年会が開かれた。年頭にあたっての挨拶で聖憲は皇紀二千六百年を取り上げ、「新しい世紀の第一学年」を踏み出した今、過去数年間に起こった国家の動向に対し、人の意志力、実践力、精神力が無ければ、それに対応することができない

いことを強調した。また、『月報』の巻頭言においては、これを機に、いよいよ日本が世界を舞台として重大な役割を担う時が来たこと、そして、そうした役割を果たすために日本国民がとるべき一つの道は日本の伝統精神を土台とする愛国、忠誠の道であることを主張したのである。

即宗教とは、太陽に生まれ太陽に恵み、太陽の一分身、一細胞にあらずして何ぞ、是れ予が宇宙万神悉く一太陽の放射線たるを唱え、太陽精神の由来も亦一に此の大真理に出発し、以て畏くも、天照日嗣天皇を戴き、世界の主宰神と拝し奉る所以である。

こうした聖憲の志向が「太陽精神碑」に象徴されていることは先にも述べたことである。同年二月十一日の紀元節に、北本宿において「大日本精神碑(太陽精神碑)建立一年祭」が行われ、そこで聖憲が講演した文言の中に、当時の聖憲の宗教的世界観について知ることが出来るものが残されている。

天下何れの処に、太陽に勝る自由堂々たる自然ある乎、予は信ずるものである、堅く信ずるものである、総ての宗教は太陽を離れて宗教なく、

聖憲が建立した「太陽精神碑」には、「太陽(自然)」を頂点とする自然観が込められている。当該の文言には、その頂点に位置する太陽を「天皇」と象徴させる聖憲の宗教的世界観が明確にうかがえよう。この宗教的世界観をもって、聖憲が目指そうとしていたのは「日本精神の顕現を土台とした真の世界平和」であり、これを聖憲は「昭和維新」と呼んだのである。さて、同日に「宗教教師教学学院」の開設がなされ、同月二十日から東

京道場において始められる「聴講会」の準備がなされた。聴講会開催の目的は、言うまでもなく「解脱の教」を広めるためである。当時は言論に対する統制の厳しい時代であった。従って、「聴講会」への参加は履歴書を添付したうえで申込制となったが、煩瑣な手続きにも関わらず、三〇〇名余りの参加者が募られた。第一回目の講師は國學院大學学長・河野省三氏であった。講演の内容は「国体に就いて」である。

河野を講師に迎えた目論見は、もちろん天皇を国の長とする国柄(国体)を会員に教導するためであったが、その「国体」というものの上に宗教が如何に位置づけられるべきかを聖憲自身の考えとして説くためであった。その内実は、昭和十六年二月号から聖憲自身が執筆し、連載が開始した「解脱講義」に詳しい(注・「解脱講義」は昭和十八年八月号(第二

十八講)をもって終了する。「解脱講義」の中で、聖憲は以下の三点を特に主張した。

- ①時代的な流れとして宗教を国民精神の支柱とすべきだという方向性が生まれている。
- ②宗教は伽藍の内に留まるものではなく、社会の中に、現実生活の中に生かされなければならぬ。
- ③宗教を国民精神の支柱とし、国家・社会に対する役割を果たしていくのが解脱会員である。

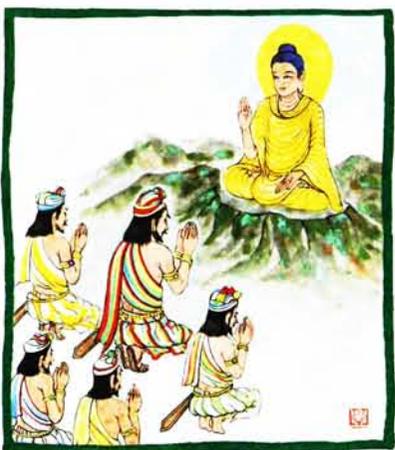
以上に記された、「宗教は精神的な支柱であるべきであり、人々の生活に寄り添うものであるべきだ」という主張は、どのような時代を迎えても必要とされる「宗教の普遍的価値観」を言い得ていると考えられるだろう。この実践を「敬神崇祖」「報恩感謝」という主張に込めたのが聖憲のそもその理念である。この



「宗教の普遍的価値観」を実践する動きとして、この時期に聖憲が試みたのが「三聖地巡拝」であり、「真綿モール編」である。伊勢神宮(外宮・内宮)、橿原神宮、御寺泉涌寺を巡拝する三聖地巡拝の概要と理念については先にも述べたので繰り返さない。昭和十六年四月一日から始められたこの行事に関して、聖憲は「日本建国の悠遠を基礎とし、是れに加味するに時代の歩調を以てする」ことが日本における宗教のあるべき姿であると「解脱講義」において説いている。これは、常に建国の歴史に回帰し、その上で宗教の必然を実践すべきであるとの主張でもあろう。そして、今一つの実践である「真綿モール編」の普及が始まるのであった。

釋尊の帰依

句・菅谷秀文



絵・橋本豊治

ま マガダ国ビンビサーラ王釈迦に帰依

釈尊が最も多く説法をし、また好んで瞑想をしたとされる場所はマガダ国の首都王舎城であったという。

この国の王は釈尊が修行中、行など止めてもとの王族に戻り生きることをすすめ、軍隊と資財の提供を申し出たという。その後、悟りを開いた釈尊は再び王と出会い、王は帰依したという。

そして説法をよく聞き釈尊とその弟子達に食事の喜捨もし、僧院も寄進した。このことによりインドにおける最大の都市に仏教伝道の根拠地を得た。釈尊は王たちにも決して迎合せず、彼らに超然と教えを説いた。